

分娩事故を減らすために

分娩予知通報システムの紹介

北海道における乳用牛頭数は減少傾向にあり、乳量生産は従来に比べて伸び悩んでいます。課題として、後継牛をどのようにに確保するかが重要であり、子牛の死産を減らすためには、分娩管理改善への取り組みが必要です。

1 分娩事故による死産率

鶴居地区の死産頭数は、直近7ヶ月で325頭でした。これは分娩頭数の9%です。戸別では死産率が10%を超える農場は21戸あります。死産率5%以下が目標であることから、分娩事故が多発していると言えます(図1)。

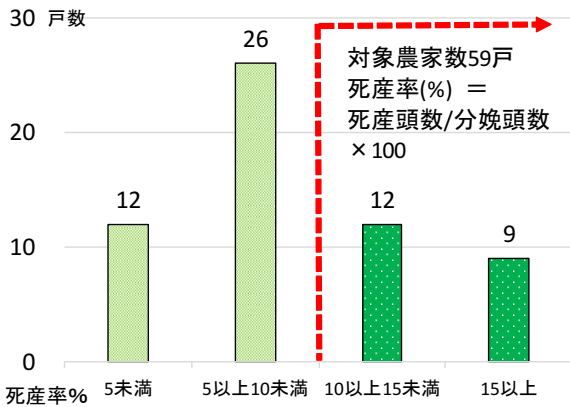


図1 鶴居地区死産率の分布 (H30年4月～10月共済調)

「進行」

①子宮頸管が拡張

陣痛が始まる。牛は頻りに尾を上げながら寝起きを繰り返す。胎児が産道に進入する。

②胎児の娩出

母牛が踏張ることで、尿水を含んだ膜が破裂(第一次破水)する。さらに蹄が見え始め、羊水を含む膜が破れて蹄が現れる。

「兆候」

①分娩3週間前

乳房・乳頭が腫脹、外陰部が腫脹する

②分娩2～3日前

子宮外口部が拡張する

③分娩前日

尾根部両側の靱帯が弛緩する
体温が急激に低下する

2 分娩の兆候と進行を理解する
分娩事故を減らすには、分娩管理の見直しが必要です。そこで、正常な分娩の兆候と分娩の進行についてまとめてみました(図2)。ここでは、ポイントのみを整理してお伝えします。

図2 分娩の兆候と進行(石井三都夫氏DairyJapan2010年11月号を参考に記載)



写真2 丸印が体温感知センサー

今回は「牛温恵(ぎゅうおんけい)」について紹介します。この装置は、膣内に装着することで、分娩前特有の温度低下を検知し、携帯電話へ「段取り

3 分娩予知通報装置の利用
管理者は母牛の体温低下を確認し、第一次破水を見つけることで、その後の対応を決めることができます。しかし、管理する人が少ない、ほ場作業が多い等、母牛を常時観察するのは難しいことです。そんな時、分娩開始を伝えるための便利な装置があります。



写真1 第一次破水を確認
(石井三都夫氏提供)

「段取り通報」が知られます。管理者は、それを知らせるまで分娩を気にせず、他の作業に集中できます。また、「駆けつけ通報」が来れば、分娩牛舎に行き、異常が無いか確認し、その後の対応を決めることができます。分娩管理にお悩みの方は農場に合った装置等の導入を、是非、検討されてはいかがでしょうか。(平成30年10月執筆)



写真4 体温感知センサー装着完了



写真3 センサーを分娩予定1週間前に挿入